

[書評論文]

串田秀也著『相互行為秩序と会話分析：
「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』

京都：世界思想社，2006. pp.ix+374 ISBN4-7907-1228-1

北野浩章

1. はじめに

本書は、串田秀也氏の博士論文（京都大学大学院人間・環境学研究科）をもとに加筆修正された後、出版されたものである。この書評では、串田氏を「筆者」、この書評を執筆している北野を「評者」と呼ぶことにする。

日本語を対象とし、日本語で書かれた会話分析の研究書はこれが初めてだそうである（西阪・西澤 2007 による）。これまでは、会話分析やエスノメソドロジーの入門書、翻訳書はあった（例えばサーサス 1998、好井・山田・西阪編 1999 など）。また、語用論の教科書にはしばしば会話分析、会話構造などの章も含まれていることが多い（Levinson 1983、高原・林・林 2002 など）。しかし、もっぱら言語やコミュニケーションに焦点をあてて書かれた会話分析の書物はこれまでなかった。そういう点で本書は、語用論を専門とする者だけでなく、日本語学者や一般の言語学者にもアピールする内容を含んだ待望の書である。

本書の中心テーマ（目標）

36 ページには次のように書かれている。

- (1) 語用論的コミュニケーション論に代わるコミュニケーション研究の新しい探究の道筋を示すこと。

会話分析が従来の社会学とは異なる形で行為に働く社会的拘束を探究する方法であることを例証すること。

この第一の目標にある「コミュニケーション研究の新しい探究の道筋」は言語学者にとっても根本的な課題であるはずである。

本書がよって立つ研究の基本的枠組みは、広くは社会学であるが、より限定的にはエスノメソドロロジー (ethnomethodology)、さらには会話分析と行うことができる。エスノメソドロロジーが扱う対象は、必ずしも言語そのものというわけではない。また会話分析は、会話を研究対象とするが、会話の中の言語のみを扱うわけではない。そのため、多くの言語学者にとっては「近くて遠い」隣接分野であったかもしれない。

本書の構成

各章は以下のようになっている。

- 1章 相互行為秩序と会話分析
- 2章 参加の組織化と連鎖装置
- 3章 オーヴァーラップ発話の再生と継続
- 4章 言葉を重ね合わせること
- 5章 「そう」と「うん」：ターンスペースと行為スペースへの参加の再組織化
- 6章 経験を語りあうこと：拡大された行為スペースへの競合的共参加
- 7章 討論

著者の研究が展開される実質的な章は、3～6章である。2章では、そのための分析装置が説明される。1章の序論では、語用論的コミュニケーションと会話分析との対比がされている。7章では、言語コミュニケーションの文化差の問題など、特に人類言語学者やフィールド言語学者にとって興味深い、重要な問題が扱われている。

本書評では、まず各章(2～6章)を簡単に紹介する。言語学者(語用論学者)にとっては特に3章と5章が特に関連が深い。以下の簡単な紹介では内容がわかりにくい、本書評をきっかけに本書に興味を持っていただければ幸いである。

2. 各章の紹介

会話分析では実例が大変重要であるが、それを詳しく紹介することは紙幅の都合上できない。そのため、キーワードを中心とした簡略な紹介になることをあらかじめお断りする。また、評者の経験不足、能力不足もあり、筆者のすべての議論を完全に理解したわけではないことも付け加えておく。

参加の組織化と連鎖装置(2章)

「参加の組織化」とは何か：(「話し手」「聞き手」といった言葉で表されうる)相互行為の中での様々な行為者のあり方を、人々が互いのふるまいの配列において／として区別する

とともに、それらの立場の布置として相互行為の状況をそのつど定義づけていく過程 (p.34) のことである。

2章では、会話分析において参加の組織化を考えるための基礎となる二つの「組織」が紹介されている。それが、ターンテイキング組織 (p.49) と連鎖組織 (p.62) である。ターンテイキング組織は、会話におけるターン (会話への参加機会) の配分がどのように行なわれるかについての手続きの複合体である。サックス・シエグロフ・ジェファーソン (Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) の有名な定式化があり、この章でも詳しく紹介される。

もう一つの連鎖組織とは、発話と発話の連鎖にみられる各種の規則的なパターンを定式化したセットのことである。よく知られたさまざまな隣接ペアも、連鎖組織のセットの一部をなしている。

さらにこの章では、会話分析の部外者にはわかりにくい、次のような概念の説明がある。

(2) 投射 (p.53) : ある時点までに発せられた言葉は、その発話の次のようなもの (a-c) を予示・予告する性質があるが、この予示・予告を「投射」という。

a. 統語的形狀

すぐ次の瞬間にどんなタイプの統語要素が発話されそうか
その発話はどんな統語構造をとりそうか、など

b. その発話の種類

その発話はどんな行為を行うものになりそうか

c. その発話の完了可能点

その発話はいつ完了しそうか

また、言葉に備わった投射を可能にする性質のことを「投射可能性」という。さらに、連鎖組織においては、後続する発話連鎖に関して以下のことを予示・予告することも「投射」と呼ぶ (p.64)。

(3) d. 進行中の発話連鎖にはどんな種類の発話がどんな順で現れそうか

e. 進行中の発話連鎖の中で誰がどんな立場を占めそうか

f. 進行中の発話連鎖はどんな種類の発話が現れることで適切に完了しうるか

次に「リソース」である。

(4) リソース (pp.53-54) : 相互行為の中でさまざまな行為や活動を成し遂げるために利用可能で、かつ相手にとって観察可能な、以下のものを総称して「リソース」という。

- a. 言語的素材 (語彙、統語構造、韻律)
- b. 発話に直接伴う非言語的素材 (発話のテンポ、音の大きさ、音の長さ、声調、声質、間隙、呼気、吸気、発話の位置、など)
- c. その他の身体的素材 (視線、表情、頭部の向き、上体の向き、身振り、動作、など)

オーヴァーラップ発話の再生と継続 (3章)

二人の会話参加者が同時に発話をする、「オーヴァーラップ」と呼ばれる現象が生じる。オーヴァーラップした発話部分 (の一部) をそのまま (あるいは若干の語句の変更を加えて) 反復再生して自ら発話を完成させる手続きを、「再生」と呼ぶ (p.83)。また、オーヴァーラップした発話部分の統語的続きとなるようデザインされた発話を行って自ら発話を完成させる手続きを「継続」と呼ぶ (p.83)。3章はこのオーヴァーラップ発話の再生と継続を考察することが中心となる。

言葉を重ね合わせること (4章)

この章では、言葉を重ね合わせる工夫によって首尾よく実現されたものとしての言葉の一致、という現象を扱っている (「ユニゾン」と名付けられている) (p.117)。

同じ言葉を同時に発するという点ではオーヴァーラップもそうだが、ターンテイキングの乱れとしてたまたま言葉が重なっただけで、会話参加者たちはそこに何の意味も見いだしていないオーヴァーラップとは違い、ユニゾンは、参加者自身によって、言葉を重ねるべく工夫された出来事として生じている (p.116)。

ユニゾンはいかにして起きるのか、またユニゾンにはどのようなタイプのものがあるのか、この章で詳しく分析される。

「そう」と「うん」 (5章)

会話分析で「そう」「うん」のような具体的な言語表現が取り上げられるのは珍しいように思われる。言語学者にとっては気になる問題であろう。本書評では、以下の3節で詳しく取り上げる。

この章で焦点が当てられる現象は、先取り完了 (pre-emptive completion) と呼ばれるものである。

- (5) 先取り完了 (p.160) : ターンを開始した者がそのターンを完了可能点に持って行く前に、聞き手であった者がそこまでの発話の「可能な統語的続き」としてデザインされた発話を開始し、それを完了可能点まで持っていくという手続きのこと。

言語学の世界でも、二人以上の話者が構文（厳密に言えば「構造」 construction）を共同で作り上げる co-construction（「共同発話」と訳されることがある）という現象がしばしば取り上げられるので、なじみが深い。

「複数の話し手がひとつの発話を産出する」ことによって開始される発話連鎖を「協働的ターン連鎖」(collaborative turn sequence) (p.159) と呼ぶ。分析は、まずこの協働的ターン連鎖の第三の位置に現れる「そう」と「うん」から始まり（5章2.2）、協働的ターン連鎖と他の発話連鎖との交差によって組織された「そう」と「うん」（5章3）、通りすがりの受け手表示としての「そう」と「うん」（5章4）の分析へと進む。

ここでは詳しく説明することはできないが、協働的ターン連鎖の第三の位置での「そう」と「うん」の用法の違いとして、次のような仮説が出される (p.170)。

- (6) a. 「そう」は、相手の先取り完了が自分の開始したターンを自分に代わって完了したことを承認し、そのターンで開始した行為の実現が促進されたことを認定するために利用できる。
- b. 「うん」は、相手の先取り完了が自分の開始したターンを自分に代わって完了しているわけではないときに、それがターンの完了であることを承認するために利用できる。したがって、それは「そう」よりも多様な用途を持つ。

基本的な協働的ターン連鎖とは次のようなものである (p.164)。

- (7) 1 X : ターン構成単位の開始
2 Y : (Xが開始したターン構成単位の) 先取り完了
3 X : (Yが行った先取り完了の) 承認/拒否

実際に第三の位置に「そう」と「うん」が現れる例 (p.165) を、ここでは非常に簡略化、標準化して下に示す。これはあくまで見やすさを優先した便宜的なものである。(8) では、話し手 Y の発話 2 を、話し手 X は「代弁」として認定しているが、(9) では、発話 2 を自分の代弁としては認定しがたいが、そのターンの完了であることは承認している。

- (8) 1X : そうだってあたしあれやったのさ ;
2Y : 来る直前だもんね,
3X : そうそうそう.

- (9) 1X : このトマトほとんど、[食べたね、]
2Y : [食べちゃ] ったね [:
3X : [うん.]

また筆者は、ラーナー (Gene Lerner) の研究を引用しつつ、「そう」「うん」と、“yes”、“yeah”、“well” との比較も行なっているが、これは日英語比較の観点だけでなく、言語類型論的にも大変興味深い比較研究である。

経験を語りあうこと (6章)

この章は、二人の会話参加者が、共通する経験を競うように語り続けている会話データを詳細に分析し、共通経験は会話の中でどのようにして発見され、どのような発話連鎖手続きを用いて、どのような会話への参加の形式を通じて共通経験が語られるのか、などを考察するものである。

自分の経験を語る「私事語り」がどのように開始されるかについて (私事語りを開始できるための制約がある) の考察 (6章2) から始まり、興味の相互的モニター (6章3)、共通経験の探索と発見の手続き (6章4) といった事柄を詳細に記述している。

以上、駆け足で主な章の紹介を試みた。次に以下では、筆者が論じているさまざまな事柄から、評者にとっても、また多くの言語学者 (語用論学者) にとっても興味深い点をいくつか取り上げて論じていく。

3. 「そう」と「うん」について

言語学者なら、よく似た意味の表現の違いを考える場合、

- (10) A 「これはあなたが作ったもの？」
B 「そう」

- (11) A 「これはあなたが作ったもの？」
B 「うん」

などといった対話をデフォルトと考えて、考察を始めることが多い。このように、研究をスタートさせる前提からして、会話分析と言語学では違っている。上の例では、「そう」も「うん」も対話における答えとしては自然である。したがって言語学者は、「そう」が使えない場合、「うん」が使えない場合などを追究し、違いを抽出しようとする。

一方、会話分析者はまず会話のデータを用意し、会話分析のための理論装置をもとに、データから読み取れる会話参与者たちの相互行為、会話への参与のあり方を観察する。筆者が本書で「そう」と「うん」を観察した結果得られたことは、言語学者が見いだそうとするような「そう」「うん」の意味・機能といったものではなく、「そう」「うん」を使って会話参与者たちは何をしているか、ということである。

定延(2002)は、言語学(寄り)の立場からの「そう」と「うん」の考察であるが、「そう」と「うん」に根本的な違いはないのか、という視点から始めている。「そう」「うん」のさまざまな使われ方を取り上げ、説得力のある議論を展開している。それによると、「そう」は意味と音を備えた記号だが、「うん」には濃厚な意味を持った言語表現とのつながりは認められない。そこで、「うん」には意味がない、すなわち記号ではないとするのが妥当である、という結論である。

「うん」に関しては筆者も定延(2002)に言及しており(p.326)、会話分析と言語学研究が非常に近似した(しかも納得できる)結論を出している。異なるアプローチが整合的な結論を出しているということは、幸福な事態である。

「うん」が記号ではないというのが正しければ、それは伝統的な言語学(語用論)の対象にはなりえないだろう。一方、会話分析では、言語的リソースだけでなく、非言語的リソースも研究対象の一部である(つまり、言語と非言語に分けて、そこで線を引くことはしない)。言語学が狭い意味の言語学にとどまっておれば、会話に手を出すことは中途半端な研究しか生み出さないだろう(もちろん、会話を対象とせずとも、ある程度の研究は可能であるが)。そして、言語学も作例にばかり頼っているわけではない。自然談話をもとにした研究は今日盛んになっており、今後もより方法論を拡大しつつ発展していくことが期待される。この点については次節でさらに述べることにする。

4. リソースとしての「文」

会話分析は、言語そのものより、言語を使って何が起きているのかに関心があると言ってよいだろう。しかし、決して「文法」や「統語論」を無視しているわけではない。統語単位は重要なリソースの一つとして認識されている。そのことがよくわかるのは3章の「はじめに」と「結論」である。

3章の冒頭「はじめに」では、たいていの言語的コミュニケーション理論における単純な仮定として、「話し手は、発話であれ文であれ、その理論が設定しているコミュニケーション

の言語的単位を、最初から最後まで妨害されることなしに産出できる」ということがあると筆者は述べている。「最初から最後まで産出するうえで支障があるなら、それはコミュニケーションにおけるなんらかのトラブルや乱れである」(p.82)。これは、ごく素朴なコードモデルにおける仮定であるが、言語学では(特に、言語使用を重視しない言語学では)、今なお隠れた前提となっている。

3章で扱われているオーヴァーラップ発話の再生と継続とは、わかりやすさを優先して作例で示せば、次のようになる。下線の部分が、他者の発話とオーヴァーラップがあった部分である。(12)ではオーヴァーラップした部分をもう一度繰り返している。(13)では、繰り返すことはせず、強引に継続させて文を完成させている。

(12) [再生] これはあなた、あなたが作ったもの?

(13) [継続] これはあなた一、が作ったもの?

3章の結論で述べられていることは、これも統語構造をリソースとして利用する方法の一つである、ということである。評者が少し敷衍して述べれば、次のようになる: 統語論でいう「文法的な文」「非文法的な文」は、コミュニケーションの観点からはそれぞれ「伝達に成功する文」「伝達に成功しない文」となるように思われるが、そうではない。上の(12)(13)のように、文法的とはいいたい文も、現実の会話においては、コミュニケーション上の役割を立派に果たす場合がある。

そのような意味で、文は重要な言語的リソース、すなわち、相互行為の中でさまざまな行為や活動を成し遂げるために利用可能で、かつ相手にとって観察可能な素材の一つである。文、およびその他の言語的リソースはやはり研究対象として重要であり、会話分析は文を研究対象として放棄しているわけではない。

会話分析と言語学(とりわけ、認知・機能言語学や言語類型論)が協力してできることはたくさんある。その成果として、近年 Discourse and Grammar のアプローチのもと、多くの研究が出版されている。いくつかの論集を出版順に紹介すると、以下のようである。

- (14) Couper-Kuhlen and Selting (1996)
- Ochs, Schegloff, and Thompson (1996)
- Selting and Couper-Kuhlen (2001)
- Ford, Fox, and Thompson (2002)
- Couper-Kuhlen and Ford (2004)
- Englebretson (2007)

5. おわりに

以上、この書評ではまず、主たる章の内容を紹介した後、「そう」と「うん」、およびリソースとしての「文」の二点に絞って考えを述べた。本書の目標の一つとして、語用論的コミュニケーション論に代わるコミュニケーション研究の新しい探究の道筋を示すことがあった。この目標は十分達成されていると思われる。

この書評が、語用論から会話分析へのレスポンス、というかたちになっているかどうか心もとないが、言語学も、会話分析の刺激を受けて、従来の語用論的コミュニケーション論を乗り越えようとしていることは確かである。すでに述べた *Discourse and Grammar* のアプローチはその一つの現れであるし、また、録画資料を使った研究も少しずつ増えている。例えば本書 96 ページの分析に顕著なように、会話分析では録画資料は不可欠である。

最後に、内容以外のことでコメントをする。本書で用いられている専門用語は、英語文献の翻訳であっても、筆者自身の名付けと思われるものであっても、平易な日本語であるものがほとんどである。そのことを好ましく思った。ただ、一語だけ、「ヴァナキュラー」という語が何度か出てくる (p.21, p.22, p.25, p.39, p.206) が、日本語の日常語としてはあまり使わないのでわかりにくいように思う。しかし、このような指摘は瑣末なことである。

本書が読者として想定しているのはもちろん言語学者だけではない。しかし、会話分析の方法論や有効性を言語学に伝えるのに本書が大きな貢献をしてくれることを評者は期待している。

参考文献

- Couper-Kuhlen, E. and M. Selting. (eds.) 1996. *Prosody in Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Couper-Kuhlen, E. and C. E. Ford. (eds.) 2004. *Sound Patterns in Interaction: Cross-Linguistic Studies from Conversation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Englebretson, R. (ed.) 2007. *Stancetaking in Discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ford, C. E., B. A. Fox, and S. A. Thompson. (eds.) 2002. *The Language of Turn and Sequence*. Oxford: Oxford University Press.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. [安井稔・奥田夏子訳。1990. 『英語語用論』東京：研究社]
- Ochs, E., E. A. Schegloff, and S. A. Thompson. (eds.) 1996. *Interaction and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H., E. A. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation." *Language* 50. 696-735.
- Selting, M. and E. Couper-Kuhlen. (eds.) 2001. *Studies In interactional Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

- サーサス, ジョージ (北澤裕・小松栄一訳). 1998. 『会話分析の手法』東京: マルジュ社.
- 定延利之. 2002. 「『うん』と『そう』に意味はあるか」、定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』、75-112、東京: ひつじ書房.
- 高原脩・林宅男・林礼子. 2002. 『プラグマティックスの展開』東京: 勁草書房.
- 西阪仰・西澤弘行. 2007. 「書評 串田秀也『相互行為秩序と会話分析-「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化-』」、『社会言語科学』、9:2、93-101.
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編). 1999. 『会話分析への招待』京都: 世界思想社.